

臨床のきれはし

Sheet3

浅田 英輔

死は不幸なのか

私は現在、県庁の高齢福祉保険課というところで高齢者施策にかかわる仕事をしております。高齢者の方と直接接する機会はあまりなく、市町村の担当者の方や、ケアマネージャーさんや医師、看護師の方などと、高齢者への援助のことを中心に「どうすればもうちょっといい感じになるだろうか」ということに取り組んでいます。

そういった仕事の中で関わるもののひとつに、「看取り」があります。病院で死ぬのか、施設で死ぬのか、自宅で死ぬのか、どうやって死ぬのがよいか、自分はどう死にたいだろうかということを考えており、皆さんが死にたいように死ねる世の中のほうがいいよなあと思っています。

あるマンガのセリフに

「人が死ぬと『不幸があった』というが、人はみんな最後は不幸になるのか」というのがありました。

確かに。

みんなに囲まれて逝った人も不幸なのでしょうか。私のおじさんが90歳で死んだのは不幸なのでしょうか。

「惜しい人を亡くした」のでしょうか。みんな死ぬんだし、みんな死ぬときは「惜しい人」になるんでしょうかね。でも、不幸とは違う気がします。最後は「幸せな人生を全うした」でいいのではないのでしょうか。

では、「不幸」とはなんでしょう。不幸とは、「幸せでない」「幸福でない」ということになります。

そもそも、身内が亡くなったことを(幸せだろうが不幸だろうが)「不幸があった」というので、実際の幸不幸は関係ないかもしれませんが、それは一旦置いておきます。

では、「幸せ」とはなんでしょう。

wikiによると、「心が満ち足りていること」だそうです。wikiを斜め読みしてみると、哲学分野では、「安らか」「穏やか」「落ち着いている」といった状態も関係ありそうです。(ただ、「涅槃の境地」などともあり、一般人にとっては小難しい幸福かもしれない)

「幸せはすぐそこにある」こともあります。が、日常生活の一瞬一瞬にあるものなのかなと思います。もし心地よく死を迎えるなら、それは日常生活における最後の幸せだったりしないでしょうか。

「不幸な末路」という言い方もありますね。無関係な事件に巻き込まれて亡くなった人は不幸なのでしょうか。これは「不幸」と呼んでもよい気がします。若くして急な病気で亡くなる人もあてはまりますかね。そういう場合は、本人もそうですが、家族にとっては大いなる不幸といえる場合が多いかもしれません。

自分が今、40代で死んだら、不幸だと思うのでしょうか。もう少し生きたかったと思うか

もしれません。子どもの成長をもっと見たかったと思うかもしれません。

それでも、いま死んじゃったら不幸なのか？と疑問は残ります。そこまで毎日力を尽くして生きていたとは言えないし、「面倒だからこれは明日でいいや」と先送りしていることもたくさんありますが、私だってそれなりにがんばって生きています。長生きしたいわけではないにしろ、早く死にたいわけでもありません。実際に「持ってあと半年です」なんて言われたらちょー取り乱して、生にしがみつくだと思います。「なんで自分ばかりこんな目にあうんだ」とか思うのですが、それでも「自分は不幸だ」「不幸だった」とは思わない気がします。ましてや、他の人から「不幸だね」なんて言われたら、「余計なお世話だ」と腹を立てることでしょう。

残されたものの感情を別にすると、幸不幸とは、限りなく主観的で自分だけのものといえます。

もちろん、残された家族にはいろいろな思い、いろいろな事情があります。でもどうせなら、本人がさっぱりして旅立ってくれたらいいと思うのではないのでしょうか。人の死、特に高齢になってから迎える最期を、あまり「不幸」でくりたくないなと感じています。

今の仕事の中で聞くことのひとつに、施設の方から「認知症が進んだ状態で入所となった方の意思確認が難しい」ということがあります。「重度の認知症の方の意思確認をどうやるか」という問題はもちろんあるのですが、「意思確認ができなくなる前に意思表示をしておく」「意思を確認する」ということがより重要と考えています。

高齢者だけでなく、まだまだ元気な人も若い人も全員、自分がどう死にたいか、いざというときにはどうしてほしいのか、家族や周りの人と話しておく必要があります。

ただ、私も自分の父親にこの話をしたら、「まだだいじょうぶだよ」、冗談半分で「はやく死ねるか!？」みたいな反応でした。

こういう話は一回すればいいというものではなく、何度か繰り返す必要があるものです。もちろん、話の中で意見が変わることもあります。自分がどうやって死を迎えるのが幸せなのか話すということは思っているよりも大事なことなのかもしれません。

調べたところ、一般的なお悔やみの言葉には、1「ご愁傷さまです」、2「お悔やみ申し上げます」、3「ご冥福をお祈りいたします」があるようです。1と2は、遺族に対して気の毒に思う気持ちを表すのに対し、3は「ご本人が死後も幸せであるようお祈りします」という意味となるので、今回の考え方からすると、これはとてもよいように思います。(1, 2がよくないという意味ではない)

我々対人援助職は、こういった職種であっても「クライアントの思いを大事にする」ことを重視します。単純にクライアント一人のことを考えればよいのであればそう難しくはないのですが、実際はクライアントの周りには様々な人の思いや都合、社会の事情などがからまってきて、「どうすることが社会的に適切か」といったことに向いてしまうことも大いにあります。

そしてそれは、「本人の思い」とはだいぶ違っていることもままあります。「本人の思い」を汲むことがたまにすっぽり抜けてしまい、そういうときって誰のために関わりをもっているのだろうと疑問になります。自戒してかわっていきたいです。